

映画テキストを使った英文法の指導

Teaching English Grammar with the Use of the Film Text

田中茂範

Shigenori TANAKA

慶應義塾大学

Keio University

Abstract

Many Japanese students tend to consider English grammar to be a school subject independent of communicative activities, and continue learning it without being able to feel the power of grammar in actual usage. This is unfortunate because grammar is essential to acquiring communicative competence in English. We need to put grammar in the context of real language use. Travis (1948) is probably the first researcher who discussed the possibility of using movies for teaching a second language, and now, with the advancement of digital technology, a growing number of people are interested in teaching a second language through movies (Stempleski & Tomalin, 1990; Wood, 1995; Stillwell, 2009; Eken, 2003; Lowe, 2007; Sweeting, 2009). In this paper, I argue that the film text, being professionally authentic and meaningful, can be the best context in which we teach how grammar works. Using the movie (transcript) is, however, one thing, and how to use it is completely another matter. The question here is how we make the most of movies and make good exercises out of them. In this connection, I argue that we need to give the rationale for our exercise activities by answering the question of why we do what we do.

Key Words

The Film Text, Grammar in Text, Chunking, Dialogue, Authenticity

1. はじめに

英語学習において、文法の学習には、どうもリアリティがないように思われる。文法の学習が生英語と結びつきにくいということである。そこで、文法を学んでも英語が使えるようにならない、という文法学習について否定的な意見が聞かれることが多くなる。しかし、文法力なくして英語力は存在しない。文法力を身につけることは、間違いなく英語力の核心部分である。どの発話を取り上げても、文法力が関与しない発話はないからである。

本稿では、文法学習にリアリティを持たせるため、映画の中で文法を学ぶ(指導する)ということ提案したい。映画を外国語教育に利用することの可能性については Travis (1948)が議論しているが、実践となると技術的な問題があり、本格的な議論が盛んになっ

たのは最近になってからである(Stempleski & Tomalin, 1990; Wood, 1995; Stillwell, 2009; Eken 2003; Lowe, 2007; Sweeting, 2009)。我が国でも、1995年に「映画英語教育学会(ATEM)」が設立され、活発な研究が進められている。

本稿で取り上げたい論点は、(1)「映画の中で学ぶ文法」とは何か、(2)どうして映画テキストがよいのか、そして(3)映画を使った効果的な文法指導の方法とは何かの3つである。

2. 映画の中で学ぶ文法

まず、映画を使った文法学習が目指す文法力とは何か。そもそも文法力とは何かといえ、それは「状況に応じて適切な発話を自在に紡ぎ出す力」である。このことを踏まえて、筆者は、映画を使って養成すべき文法力には以下の2つが含まれると考える。

- (1) チャンキングによって発話を生み出す力
- (2) 文法項目を言語実践の中で使う力

2.1 チャンキングによって発話を生み出す力

発話の基本単位は「チャンク(chunk)」である。チャンクとは、息継ぎ(pause)によって画定される言語単位のことである。例えば Why don't you give him another chance? という発話をする際に、話し手が Why don't you / give him another chance? と Why don't you のあとで息継ぎをすれば、ここには2つのチャンクがあることになる。この2つのチャンクを連鎖化させることを「チャンキング(chunking)」と呼ぶ。筆者は、チャンキングが自然な言語処理のプロセスを反映したメカニズムであるという前提に立つ。言い換えれば、チャンキング的発想を身につけることが文法力の大きな要素である。

チャンキングを自然言語処理のプロセスとする前提の根拠となるのが、言語の「線条性(linearity)」という性質である。線条性とは、時間軸に沿って展開する言語表現のありようを捉えたものである。言語には、図1に示すように系列軸(paradigmatic dimension)と統語軸(syntagmatic dimension)の2つの軸があることが、ソシュール以来、言語学では広く認められている。まさに、これが言語システムの最大の特徴であるといえるだろう。

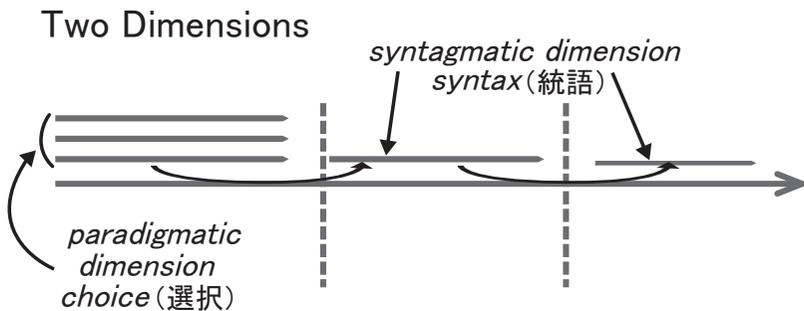


図1 言語の線条性

系列軸は表現選択の軸であり、統語軸は表現連結の軸である。言い換えれば、言語処理にはチャンキングが自然な形で行われるということである。チャンキングにはその都度のチャンクの選択が前提となる。例えば、Long ago people believed that the dead came back to life on Halloween. Now people remember Halloween by going to parties or trick or treating. という2つの文は、以下に示すように、その都度のチャンクの選択とその連鎖によって構成されている。

Long ago / people believed / that the dead came back to life /
 on Halloween.// Now / people remember Halloween / by going to parties /
 or trick or treating.//

Long ago は1つのチャンクであり、people believed はそれに続くチャンクである。Long ago の代わりに Many years ago だとか A long time ago などを選択肢としては可能だったはずである。しかし、ここでは Long ago というチャンクを選択している。同様に、people believed も1つの選択であり、it was believed だとか there was a belief などを選択肢として考えることができる。つまり、チャンクを選択し、チャンクをつなげることで発話行為が行われるということである。

このように、言語は線条性という特質を持つことからチャンキングは自然な言語処理のメカニズムとなるわけだが、ここで注目すべきは、チャンクは全体の部分ではなく、表現行為のさなかにあつては「断片(fragment)」として特徴づけられるということである。すなわち、表現行為は断片連鎖を通して行われるのであって、文連鎖ではないということである。断片は完全な文を想定しない。断片連鎖としてのチャンキングは自然な思考の流れの反映であるといえる。日常言語における文法ということを考える際に、このチャンクの断片性ということは強調しておく必要がある。なぜなら、英語の運用力に欠ける人の際立った特徴として、頭の中で文を作り、そしてそれを発話するという流れに囚われていることが挙げられる。これは、端的に言って不自然なプロセスである。頭の中で文を作れば、認知的負荷が高くなる。それだけでなく、頭の中で作った文を発話するというのは、会話の流れにぎこちなさを生み出す。さらに、文法的に正しい文にこだわる傾向が学習者の間で見られるが、文法的に正確すぎる文は改まりすぎて、日常会話ではかえって不自然とみなされることさえある。

2.2 文法項目を言語実践の中で使う力

映画を使って養成すべき文法力の2つめ、文法項目を言語実践の中で使う力については、例えば「時制」「関係代名詞」「助動詞」「不定詞」というのは文法事項であるが、実際の言語使用の中でどのように使われるのかがわからなければ、文法の学習はコミュニケーションの力になりえない。例えば助動詞 shall について文法書にしたがって学習しても、その実際の使い方は知ることができない。つまり、文法のための文法学習にはリアリティがない。文法を実際の言語使用の中に位置づけて学習する必要がある。そこで筆者が提案するのは「テキストの中の文法(grammar in text)」という考え方である。すなわち、生の言語使用の

テキストの中で文法を捉えるということである。shall が当該の文法項目だとすれば、例えば以下のようなコンテキストを示すことができよう。

“... But we are united in this crusade. We shall liberate Europe. We shall restore freedom. We shall make the world safe for democracy. There is no other cause so urgent as to bring us far from our homes. This is our purpose.” [映画 *Ike: Countdown to D-Day*, Robert Harmon 監督, 2004] しかしながら、我々はこの聖戦において団結している。我々はヨーロッパを解放する責務を負っている。我々は自由を回復する責務を負っている。我々は民主主義のために世界を安全にする責務を負っている。故郷を遠く離れて我々を集結させる緊急性の高い大義は他にない。これが我々の目的なのだ(筆者訳)。

これは映画 *Ike: Countdown to D-Day* の中でアイゼンハワー将軍が戦争への決意を表明する場面である。ここで「意志」ではなく、「そうあるべき」という「当為」が意図されていることから、will ではなく shall が使われていると考えることができる。意志というよりもっと大きなミッション(責務)に突き動かされて行動するというアイゼンハワー将軍の思いをこの shall の使用に読み取ることができる。あえて訳せば「～する責務を負っている」という感じである。このように、shall の学びにリアリティを与えるために、映画という生の教材は有効である。

3. 映画テキストを教材とする根拠

文法学習と実際の言語使用を架橋することが、リアリティのある文法学習(指導)につながる。しかし、実際の言語使用(生の教材)といっても、それは数限りなく存在する。では、その中で映画テキストを選ぶ根拠は何だろうか。

教材の良し悪しを決める基準は、学習者にとって、authentic であること、meaningful であること、そして personal であること、の3つだろうと筆者は考えている。authentic な教材は artificial な教材との比較で評価される。artificial とは人工的であり、味気ない。本物は人を惹きつける力を持つ(Stillwell, 2009)。しかし、authentic であることが教材としての十分条件ではない。authentic であると同時に、学習者にとって meaningful でなければならない。ここでいう meaningful とは「理解可能であること(comprehensible)」そして「面白いこと(interesting)」という認知と情意の両面を含むコンセプトである。authentic で meaningful であることが学習者にとってよい教材ということである。さらにいえば、人は personal なことに反応しやすい。自分のこととして状況を捉えることができること(つまり、personalize できること)、これが personal であることの意味である。

この3つの条件—authenticity, meaningfulness, personalization—を満たすテキストは多い。歌、詩、スピーチ、インタビュー、小説、日常会話、会議などジャンルや目的という観点から見れば、無数のテキストが考えうる。そこで、「どうして映画テキストか？」が問われなければならない。

言語使用の中心にあるのは日常会話である。言い換えれば、日常会話はすべての言語活動の基盤となる。このことから、日常会話がここで関心のある文法学習の最良のコンテク

ストを提供するといえるかもしれない。しかし、日常会話は即興で行われる双方向のやりとりであって、そのことが教材として取り上げることを難しくしている。日常会話は、断片的であり、絶えざる修正が見られる。結果として、意味的に冗長であり、表現的に修正の痕を多く残す。確かに、上記のように、断片的な言語活動(チャンキング)は表現のための文法力の主要な柱である。しかし、教材として取り上げるには「あまりにも生々しい(too raw)」のである。

ここで日常会話の具体例を見てみよう。ある20代後半の女性が、高校生活最後の日、ある男子からプレゼントを手渡された。しかし、距離をとりたいと思っていた男子だったので、それを彼の目の前でごみ箱に捨ててしまったという出来事を後悔の念を抱きつつ回想している場面である。

“And then I looked at his face, and I thought, really ... I, uh, it’s something that just ... I would love to apologize, because you know, it was – it’s just something, I thought, why am I it was a really wonderful thing that he did. This has haunted me for a long time. He didn’t have a lot of money. He was a really nice guy ... and he just wasn’t my crowd, you know that kind of thinking.”

これは語られた言葉をそのまま書き取ったものだが、チャンク分析すれば以下のようになる。

“And then / それで
I looked at his face, / 彼の顔を見たの
and I thought, really ... / で、思ったのよ、本当に
I, uh, / 私って、
it’s something / それって
that just ... / ただの
I would love to apologize, / できたら謝りたい気持ちだわ
because you know, it was – / なぜって、わかるでしょう、それって
it’s just something, / それはただ
I thought, / 思ったのよ
why am I / なぜ私って
it was a really wonderful thing / それって本当にすばらしいことだったのに
that he did. // 彼がしたことは
This has haunted me / このことがずっと気になって
for a long time. // 長い間ね
He didn’t have a lot of money. // 彼ってあまりお金を持っていなかった
He was a really nice guy / というか彼は本当はいい人だったんだけど
... and he just wasn’t my crowd, / でも私たちとはちよつと違うというか、
you know / わかるでしょう
that kind of thinking.”// そういう考えて

このように文字にすれば、日常言語は文の連鎖というより断片連鎖によって成り立っていることがよくわかる。このことは言語事実として重要である。つまり、チャンキングの発想で表現をする際に話し手は何をしているかといえ、次の2つの原理にしたがった行為を行っているのだといえる。

1. 情報追加の原理：必要なだけ情報を追加しなさい。
2. 軌道修正の原理：必要に応じて、軌道修正を行いなさい。

軌道修正のしかたとしては、繰り返す、言い直す、言いよどむ、話題を放棄するなどがある。文法学習の目標は、こうした原理にしたがって、自由自在に英語を使うことができるようにすることである。しかし、そのための教材として実際の日常会話をそのまま取り上げるには無理がある。上で述べたようにあまりにも生々しく、教材としてそれを再現するには構文的にも意味的にもかなり無理があるからである。

そこで、筆者は、映画の中のやりとり(会話)が、文法力を身につけるための教材として最良だと考える次第である。以下、その理由について述べる。

映画の会話は、台本に基づいて行われるため、俳優は台本を読み、練習した上で映画製作におけるやりとりを行う。そのため、基本的に映画は会話体で構成されるが、日常会話と比べて断片性が低く、より構造化されており、意味的冗長さも低い。また、映画には、会話だけでなく、詩、手紙、演説などさまざまなジャンルの英語が含まれることがある。一言でいえば、映画のテキストは“professionally authentic” (プロにより洗練された本物)であるということである。もちろん、映画作品の中での会話であるが故に、場面が *meaningfulness* の条件を担保する。そして、学習者が感情移入すれば、*personal* なテキストになりうる。

映画の会話が日常の会話とどう違うかを見てみよう。以下は映画 *The Blind Side* (John Lee Hancock 監督, 2009) からの会話場面の抜粋である。

Leigh Ann: He's a great kid. //

Sherry: Leigh Ann, / is this some sort of white guilt thing? //

Elaine: What would your Daddy say? //

Leigh Ann: Um... / before or after he turns around in his grave? // Daddy's been gone five years, / Elaine. // Make matters worse, / you were at the funeral, / remember? // You wore Chanel and that awful black hat. // Look, / here's the deal, / I don't need y'all to approve my choices alright, / but I do ask / that you respect them. // You have no idea / what this boy has been through / and if this becomes some running diatribe, / I can find overpriced salad / a lot closer to home. //

映画の中では、これはごく自然な会話である。しかし、よく見ると文として整っており、上で見た日常会話の例とはだいぶ構造的に異なる。以下は Leigh Ann の発言をチャンク化したものである。

Um... で、
before or after he turns around in his grave? // 彼が墓に入る前それとも後のこと？
Daddy's been gone five years, パパは亡くなって5年になるのよ
Elaine. // エレイン。
Make matters worse, もっと言わせてもらおうと、
you were at the funeral, あなた、葬式に来ていたじゃない
remember? // 覚えているでしょう？
You wore Chanel and that awful black hat. // シャネルを着て、あのスゴイ黒い帽子
を被ってね。
Look, ねえ、
here's the deal, こうしましょう
I don't need y'all to approve my choices alright, あなたたちに私の選択を認めてく
れとは言わないわ
but I do ask だけどどうしてもお願いしたいのは
that you respect them. // 私の選択を尊重してほしいの。
You have no idea 理解できないでしょうね
what this boy has been through この少年がどんな目にあってきたかは
and if this becomes some running diatribe, で、もし私のことを非難するのなら
I can find overpriced salad 高価すぎるサラダを
a lot closer to home. // 家に持ち帰ってもいいわ。

このように、映画の SCRIPT では、不要な繰り返しだとか言い直しが含まれない形で会話が構成されている。しかし、それでも自然な会話体であるということには違いない。

さらにいえば、映画はさまざまな言語使用の場面を含むという意味において総合的である。確かに会話が中心になってストーリーは進展するが、映画全体の中には演説があったり、詩の朗読があったり、法廷での論争があったりで、生の英語表現が詰まっているのが映画という作品なのである。

4. 映画をどう使うか

実際に、教室で映画を使った文法指導を行うのに、「どうやるか」という方法論の問題が出てくる。容易に想像できるのは、映画の何か所かを取り出し、そこでの会話場面に注目して、穴埋め練習、音読練習、書き換え練習を行うといった教室での状況である。筆者は、映画を使って文法指導を行うには以下の手順が必要だと考える。

1. 映画の SCRIPT の言語分析を行う。
2. 指導のために使用する場面を選択する。
3. 映画テキストを使ったエクササイズを作成する。

順を追って説明することにする。以下の議論では具体性を持たせるため、映画 *The Outsiders* (Francis Coppola 監督, 1983年) を事例として使用する。1965年, オクラホ

マ州のタルサが舞台。グリーサーズ(Greasers)とソシューズ(Socs)と呼ばれる若者たちのグループ抗争の中に、社会階層、ステレオタイプ、大人と子どもといった問題がテーマとして織り込まれている。

4.1 スクリプトの言語分析

まず、映画スクリプトの全体を対象にして言語分析を行うと、以下のような基礎データが得られる。

- ☑映画を構成する総語数：6,140語
- ☑異なり語数：1,082語
- ☑文の総数：1,138文
- ☑文を構成する語数平均：5.4語

91分の映画だが、会話は約6,000語で構成されている。反復的使用を考慮しないで異なり語だけをカウントすれば約1,000語(I've や gotta などはこの形で1語とみなす)である。発話文は1,100文ぐらいの数であるが、文を構成する単語の数は平均すると5.4語で相対的に短い発話文で構成されているということがわかる。参考までに示すと、以下の会話場面は映画の冒頭部分からのものである。

場面1

Johnny: What's going on? やあ、どうだい？

Ponyboy: What's up? やあ。

Dally: We're early. まだ早いぜ。

Ponyboy: What do you wanna do? どうする？

Dally: Nothing legal, man. ろくなことはしないさ。

Let's get out of here. ここをずらかろうぜ。

このように、映画は(もちろん、ジャンルによって異なるが)比較的短い文で会話が構成されていることがわかる。

また、この映画は反復使用を除くと、約1,000語で構成されている。ということは、頻度の高い語とそうでない語があるわけだが、比較的頻度の高い動詞をリストアップすれば以下のようなになる。

get (76), know (48), come (34), got (30), see (30), go (27), look (24), think (21), take (18), tell (15), stay (14), killed (11), looking (11), give (10), say (10)

一目でわかるように、これらはすべて中学校で学ぶ動詞である。get が圧倒的に多く、got の形を加えると106回も使われていることになる。テキスト分析の強みは、get を取り上げた場合、それが具体的にどのように使われているか映画のスクリプト全体を通して示すことが

できることである。ほんの一部を示すと以下の通りである。

Let's **get** out of here. ずらかろうぜ。

Don't **get** wise. 恰好つけるんじゃないよ。

Get your feet off my chair! 私の椅子から足をどけてよ!

I'm gonna **get** a Coke. コカコーラでも買ってくる。

Get lost, hood! 消え失せろよ, ごろつき!

Get Johnny some, too. ジョニーにも買ってきてくれよ。

I'm sorry to **get** you away from this party, but I don't know what to do.

折角のパーティを邪魔してごめん, でもどうしていいかわからなくて。

もちろん, それぞれが使われた映画内での文脈を示すことで, **get** の練習問題を作成することもできるだろう。

J: We thought you could **get** us out, if anyone could. ぼくらを助けてくれるとしたら, 君しかないと思ったんだ。

I'm sorry to **get** you away from this party, but I don't know what to do. 折角のパーティを邪魔してごめん, でもどうしていいかわからなくて。

D: I was just trying to **get** some sleep. ひと眠りしようとしていたところさ。

4.2 場面の選択

映画のすべてを教材として取り上げるのは, 時間的に考えて現実的ではない。もちろん, 生徒各自が映画全体を観るよう促す必要はあるし, そうした機会を別途設けてもよい。しかし, 授業の中で行う文法指導のためには, 映画から場面を何か所か選ぶのがよいだろう。できれば, 10か所ぐらいを選択したい。以下は筆者が選んだ一例である。

場面: 映画の終盤, チェリーとポニーボーイがジョニーの容態について話す場面。

Cherry: How's Johnny doing? ジョニーの具合はどう?

Ponyboy: Not so good. あまりよくないんだ。

Would you come and see him? 彼の見舞いに来てくれる?

C: No, I couldn't. いえ, できないの。

P: Why not? なんでだい?

C: I couldn't. 無理なのよ。

He killed Bob. 彼, ボブを殺したでしょう。

Maybe Bob asked for it. たぶん, ボブが悪いの。

I know he did. そうだということはわかっているわ。

But you didn't know his other side. でも, 彼にも別の面があったのよ。

He could be real sweet. 本当に素敵なところだってあったのよ。

He wasn't just any boy. 彼って, どこにでもいる男の子じゃなかったの。

Bob had something that made him different... made people follow him.

ボブは彼ならではの何か、人々をついてこさせるような面があったの。

A little better than the crowd, you know what I mean? そこの連中よりちょっとはよかったのよ、わかってくれるでしょう？

P: I don't want you to go see him anyway. なら、彼を見舞ってくれなくてもいいさ。

We don't need your damn charity! 君のつまらない施しなんかいらんから。

C: I wasn't trying to give you charity. 施しをしようなんて思ってもないわ。

I only wanted to help. ただ、助けたかっただけなの。

I liked you from the start. 初めからあなたのこと好きだったわ。

The way we talked. 一緒におしゃべりしたときから。

P: Can you see the sunset from the Southside very good? 南側から夕陽がとてもきれいに見えるかい？

C: Yeah. Real good. ええ、とてもきれいに。

P: You can see it from the Northside, too. 北側からも夕陽が見えるよ。

C: Thanks, Ponyboy. ありがとう、ポニーボーイ。

You dig okay. わかってくれたのね。

このように、取り上げたい場面を決める作業が必要である。次に、選択した場面を使ったエクササイズを作成する作業を行う必要がある。

4.3 エクササイズの作成

映画を使ってどう英語を教えるか。これはどういうエクササイズを作るかの問題である。映画を使ったエクササイズといえば穴埋め式の聞き取り、書き換え、英文和訳、音読などが連想されるが、それは何のためのエクササイズであるかが問題である。目的がはっきりしないエクササイズは教育的に健全とはいえない。そこで、エクササイズの目的を明確にする必要があるわけだが、筆者は、awareness-raising(気づき)、networking(関連化)、comprehension(理解)、production(産出)、automatization(自動化)の5つが大切と考えている。すなわち、「これは気づきを高めるためのエクササイズである」「これは自動化のためのエクササイズである」といった自覚を持ってエクササイズをするということである。

4.3.1 気づき (awareness-raising)

まず、気づきについていえば、その対象は多種多様である。例えば「英語は前置詞言語である」だとか「表現はチャンキングによって行われる」といった高次の気づきもあれば、「would や could の使い方についての気づき」「慣用表現の使い方に関する気づき」といった文法形式に関する個別具体的な気づきもある。

文法形式に注視させるだけでなく、それがどういう意味機能を持ち、そして実際にどのように使われているかを分析的な観点から捉えることで文法への気づきが高まるはずである。例えば、仮定法で would や could を扱ったとしても、実際の会話でどのように使われるかは直ちに明らかではない。そこで、下記の場面のやりとりに注目させる。

- C:** How's Johnny doing?
P: Not so good. Would you come and see him?
C: No, I couldn't.
P: Why not?
C: I couldn't. He killed Bob. Maybe Bob asked for it. I know he did. But you didn't know his other side...

そして、ポニーボーイとチェリーはそれぞれの Would you ... と No, I couldn't. をどういう意味合いで使っているかをグループなどで考えさせる。文法演習などで説明した would と could を思い出させ、それをこの場面の理解に応用させるという工夫があるとよい。ポニーボーイは would を使うことで「(無理かもしれないけどできれば)彼のことは見舞ってくれるかな」と遠慮がちにお願いしている。それに対して、チェリーは No, I couldn't. と応じている。この couldn't は「仮にやろうと思ってもできないのよ」という仮定法の用法で、チェリーの立場と気持ちを表している。そのことがにわかには理解できないポニーボーイは Why not? と聞き返しているが、チェリーは再度、I couldn't. と述べている。そして、その理由を述べている。

このように、実際の映画の中で would や could がどのように使われるかを見ることは、文法項目としての would や could にリアリティを与える効果があり、生徒も「なるほど」という納得が得られるはずである。

4.3.2 関連化 (networking)

そもそも文法項目は有機的な関連性を持たないまま、バラバラな知識として学習される傾向が強い。しかし、本物のテキストには、さまざまな文法項目が含まれており、しかも、そこには意味的な連関が感じられる。以下は、ソシューズの中心人物ランディが、火事現場で中に閉じ込められていた子どもを危険を顧みずに救ったポニーボーイとジョニーの行為に言及する場面である。

- Randy:** ... I read about you in the paper. How come?
Ponyboy: I don't know. I felt like playing the hero.
R: I wouldn't have.
P: Wouldn't have what?
R: I would have let those kids burn to death.
P: You might not have. You might have done the same.
R: I don't know. I just don't know anything anymore. I never believed a Greaser could do that.
P: Greaser has nothing to do with it.

まず、直説法と仮定法が交ざっていることがわかる。テンスとしては過去を回想する表現と現在のことを語る表現が含まれる。生徒には、動詞句に下線を引かせ、過去(単純)形、現在(単純)の否定形、仮定法過去完了形などのラベルを付けるように指示する。そして、

どうして「ここでは〇〇の動詞形が使われているか」を考えさせる。個人活動でもグループ活動でもよいだろう。

注目は次の通りである。I read about you in the paper. 新聞でポニーボーイたちのことを読んだという事実が過去単純形で表現されている。「形」は「過去(単純)形」だが、「はたらき」は「過去の事実を述べる」である。それに対して、ポニーボーイも I don't know. I felt like playing the hero. と応じている。I don't know. は現在単純の否定形で今の気持ちを語り、I felt like playing the hero. で過去の出来事を回想し、「ヒーローごっこをしていたような感じだったのかも」とコメントを述べている。それに対して、ランディは I wouldn't have. と仮定法で応じている。ここでは何を言いたいのか、はっきりしないが「もしぼくがその場にいたとしたらそんなことをしなかった」という気持ちを表現する。ポニーボーイは真意を図りかねて Wouldn't have what? と応じている。このように、どんなテキストでもテンス・アスペクトを伴った動詞形(現在単純形、現在完了形、仮定法過去完了形、過去単純形、仮定法過去形など)が使われており、それらを「やりとり」という文脈の中で関連づけることが関連化(networking)のポイントである。文脈が適切な形を決めるのである。ランディの I wouldn't have. は、ランディが話題となっている火事現場に実際にいたわけではないということを考えるれば、自然な選択である。ポニーボーイが You might have done the same. という箇所があるが、「同じことをしていたかもしれない」という思いを might でやんわりと表現している。

動詞形の形とはたらきの観点から、フローチャートのような形で関連化する作業を生徒にさせるのもよいだろう。

read 過去単純形→過去の事実を述べる。

don't know 現在単純形(否定)→今の気持ちを述べる。

felt like (playing) 過去単純形→過去の出来事を回想しコメントする。

wouldn't have 仮定法過去完了形→その場に自分がいたとしたら「そんなことはしなかった」と仮想の状況を述べる。

Wouldn't have (what?) 仮定法過去完了形→相手が立てた仮想状況を受けて、真意を確認する。

would have let 仮定法過去完了形→仮想状況の中での行動を具体的に述べる。

might not have 仮定法過去完了形→相手の仮定の話をやわらかく打ち消す。

might have done 仮定法過去完了形→相手が現場にいたとしても同じことをしただろうという可能性を述べる。

don't know 現在単純形(否定)→現在の実際の気持ちを表明する。

don't know 現在単純形(否定)→現在の実際の気持ちを反復して表現する。

never believed ... **could do that** 過去単純形(否定)→これまでの経緯で(過去に)思ってもいなかったことを明かす。

has (nothing to do with it) 現在単純形→実際にはそれは違うと現在の心境として語る。

関連化のエクササイズは、動詞表現のテンス・アスペクトに注目することで知識の統合化を図るのが目的の1つであり、この場合は「気づき」と連動するのが効果的である。

4.3.3 理解 (comprehension)

次に、理解を促すエクササイズについてであるが、英文を和訳するだけでは理解にはつながらない。理解には内容構成 (content construction), 共感的投射 (empathic projection) が含まれる。共感的投射とは、話された言葉を手掛かりにしながら、話し手の意図、態度、それに表情を読み取ることである。ここでいう意図とは「何かを言うことによって何をしたいのか、何をしてほしいのか」といった行為意図のことを指し、「同情してほしい」「当惑した気持ちを表す」「否定する」「依頼する」「誤解を解く」などさまざまな行為が含まれる。

ここでいう「態度」は「発話態度」のことで、原則は「誠実に、あるがままに語る」という態度がデフォルトである。しかし、反対の極には「嘘をつく」があり、真実と嘘の間には「冗談」「皮肉」が含まれる。そして、映画の場合には視覚情報が表情把握の手掛かりになるが、小説の場合のように文字情報からも表情を読み取ることができる。

「内容構成」がテキストの「発話の意味」だとすれば、「意図・態度・表情」は「発話者の意味」ということになる。そこで、ここでいう理解とは発話の意味と発話者の意味の融合として捉える必要があり、エクササイズもその両面に注目したものでなくてはならない。上の例でいえば、チェリーの No, I couldn't. の表現に含まれる、彼女の意図や表情を読み取るというエクササイズがそれである。

しかし、テキストの種類によっては内容構成が中心になる場合もある。映画の中で詩を朗読する場面があるが、詩の理解は内容構成が中心となる。

場面：隠れ家での数日後、ジョニーとポニーボーイが美しい夜明けに感動し、ポニーボーイがフロストによる詩を朗読する場面。

Johnny: That was sure pretty. 本当にきれいだったな。

Ponyboy: Yeah. The mist is what's pretty, all gold and silver. うん、なんとも言えないね、あの霞は。金と銀の輝きだった。

J: Too bad it can't stay like that all the time. ずっとそのままではいられないなんて残念だな。

P: Nothing gold can stay. 黄金に輝くものはとどまっではいられない
Nature's first green is gold. 自然の最初の緑は黄金だ
Her hardest hue to hold. とどめておくことができない色合いだ
Her early leaf's a flower. 自然の初葉は花だ
But only so an hour. しかし、ほんの1時間もすれば
Then leaf subsides to leaf. やがて葉は葉になり
So Eden sank to grief. そしてエデンは悲しみに沈んだ
So dawn goes down to day. そして夜明けは昼になっていく
Nothing gold can stay. 黄金に輝くものはとどまっではいられない

J: Where did you learn that? That's what I meant. それ、どこで学んだの？ まさに言いたかったことだよ。

P: Robert Frost wrote it. I always remembered it 'cause I never quite knew what he meant by it. ロバート・フロストが書いた詩だ。いつもなんとなく覚えていたんだ、どういう意味か全くわからなかったからね。

この詩をどう解釈すればよいだろうか。解釈の可能性が内容構成の際の前提となる。まず、nature's first green と her early leaf が賞賛される。

Nature's first green is gold.
Her early leaf's a flower.

しかし、but only so an hour に続き、輝きは失われることを嘆く表現にシフトする。そこでは、「下方への移動(downward movement)」というイメージが反復されている。

Leaf subsides to Leaf
The Eden sank to grief
Dawn goes down to day

理解において、なぜ Dawn goes down to day. なのか、Leaf subsides to leaf. とはどのようなことかなどが鍵となる。dawn は the Eden として表現されている。そして、エデンが the Fall of Man (人間の墮落)を経て、day (生きる現実世界)になるという構図を読み取ることができる。Leaf subsides to leaf. はまさに、「花としての葉がただの葉に戻る」という意味において現実の象徴として読み取ることができよう。どうして「下方への移動か」という点について、「花」の自然のサイクルを考えてみることができる。葉からつぼみに、そしてつぼみから花に、そして花もいずれは散るという流れを連想することができる。ちょうど、葉が地面に落ちるのが自然であるように、Dawn goes down to day. も自然な流れである。結論は、Nothing gold can stay. (すべては移ろう)である。まさに、her hardest hue to hold (とどめておくことが最も難しい色合い)である。文法的な観点からは、subsides to と goes down to が現在形であるのに対して、sank to は過去形になっているのはどうしてかを理解の観点から議論するのもよいだろう。また、詩の翻訳プロジェクトをグループ単位で行うのもよいだろう。翻訳の成果を発表し合い、生徒同士で評価をするというのもいいだろう。翻訳は総合的な文法力が問われるプロジェクトである。

4.3.4 産出(production)と自動化(automatization)

産出のエクササイズを工夫する際に大切なことは、チャンキング的発想力が身に付くこと、それにコンテキストの中でぴったり合った表現を選択することができることの2つである。産出は自動化を意識して活動するのがよい。チャンキング的発想を身に付けるのに適した場面としては、以下(息継ぎにしたがってチャンキングしたもの)がある。これは映画の終盤、ジョ

ニーがポニーボーイに宛てた手紙を自ら音読する場面(一部)である。上で取り上げたフロストの詩“Nothing gold can stay”に言及している。

I've been thinking about it, / そのこと(火事で子どもを助けたこと)をずっと考えてたんだ

and that poem, / それと, あの詩のこともね

that guy that wrote it. // それを書いたあの人。

He meant you're gold / 彼が言いたいのは, ぼくらは黄金だということ,

when you're a kid, / 子どもの時は

like green. // 緑のように。

When you're a kid / 子どもの時は

everything's new. // なんだって新しい。

Dawn. // まさに, 夜明けだ。

Like the way you dig sunsets, / 夕陽を見て思った時のように

that's gold. // あれが黄金なんだ。

Keep it that way. // ずっとその気持ちを持っていてね。

It's a good way to be. // そうあるのはいいことだから。

チャンキングを意識して、セリフを声に出して言う訓練が必須である。もちろん、セリフの元の音声をしっかり聞き、音を一旦止めて繰り返す(repeating)、音声の後を影のように追いかけて読む(shadowing)、音声と声をかぶせるように読む(overlapping)などを通して繰り返すなどの訓練を重ねることで、音声的な特徴も会得することができるだろう。これはチャンキング的発想で英文を産出する訓練になるだけでなく、テキストの英語を自動化する訓練にもなる。

映画のセリフを声に出して言う訓練が十分にできたら、場面の中で役を演じるロールプレイングを行うことで、感情を込めた表現活動が可能となるはずである。その場合に大切なのは、感情移入をすることである。役になり切り、演じ切ることである。映画の中の10個の場면을演じ切ることができるようになれば、チャンキング的発想を身につける上で高い効果が期待でき、また文法項目が実際にどのように使われるのかについても身体感覚のレベルで理解することができるようになると思われる。上の手紙では指示詞の **that** や現在完了進行形の **I've been thinking** や様態を表す副詞表現の **like the way** などが注目に値する文法項目である。

5. おわりに

映画は英語学習(文法学習を含む)のための最良のテキストを提供する。日常会話をなぞり、暗記しようとはしないが、映画の名場面は自然と覚えたい魅力がある。確かに、日常会話は **authentic** であり、その **authenticity** を映画のセリフは備えていないかもしれない。しかし、映画の英語は **professionally authentic** なのである。何度も修正され、計算された言葉が映画にはある。映画は、文法の学習においてリアリティを感じさせてくれる最

良のテキストである。課題は、教師一人一人が、映画のテキストをどうエクササイズに変換していくかである。そして、エクササイズを広く共有することで、新しいタイプの文法の学びが広まっていくことを期待したい。

参考文献

- Braddock, B. 1996. *Using films in the English class*. Hemel Hempstead: Phoenix ELT.
- Chetwynd, L. (Writer) & Harmon, R. (Director). (2004). *Ike: Countdown to D-Day* [Television film]. New York: A&E Television Networks, LLC.
- Eken, N. 2003. You've got a mail: A film workshop. *ELT Journal*, 57, 1-59.
- Hancock, J. L. (Writer/Director). (2009). *The Blind Side* [Motion picture]. United States: Warner Bros. Pictures.
- Lowe, M. 2007. Films in English Language Teaching. *IH Journal Issue*, 23, 16-19.
- Rowell K. (Screenplay Writer), Hinton, S. E. (Novel Writer), & Coppola, F. F. (Director). (1983). *The Outsiders* [Motion Picture]. United States: Warner Bros. Entertainment, Inc.
- Stempleski, S. & Tomalin, B. 1990. *Video in action: Recipes for using video in language teaching*. New York: Prentice Hall.
- Stillwell, C. 2009. Authentic video as passport to cultural participation and understanding. In M. Dantas-Whitney & S. Rilling (Eds.), *TESOL Classroom practices: Authentic materials*. Alexandria: TESOL.
- Sweeting, A. 2009. *Language through Film*. Sydney: Phoenix Education.
- Travis, J. E. 1948. The Use of the Film in Language Teaching and Learning. *ELT Journal*, 1, 145-149.
- Wood, J. 1995. Good video movies for teaching English as a foreign or second language. (ERIC Document Reproduction Service No. ED389225)